

6 骨髄バンク支援

全国に先駆けて運動

「もう十年、十年にもなりますか」。県骨髄バンク推進連絡協議会運営委員長を務める陽田秀夫さん(五)「いわき市」は静かな口調で、骨髄バンク支援でたどったボランティア活動の足跡を振り返る。

全国には、公的骨髄バンクを運営している骨髄移植推進財団を、市民サイドで応援しようという骨髄バンク推進連絡協議会などがある。全国四十八ある加盟団体の中で、本県の推進連絡協議会(太田緑子会長)は唯一、一県に五つの支部を持つ。

この中でも、全国に先駆けて公的バンク設立運動が起きたのがいわき市で、市内の四人の患者とその家族、医師らが中心となって今から十年前に運動を始めた。

いわきでの運動を語るには、当初から中心となった陽田さんの存在が欠かせない。冷静で着実な行動力。バンク活動にかかわる多くの人が、信頼と期待を寄せる。

活動が盛り上がるきっかけとなったのは、一九九〇(平成二)年に「いわき骨髄バンク推進連絡協議会」の発足を記念して開かれたシ

ンポジウムだった。席上、白血病と闘っていた陽田さんの妻茂子さんが「私の体には、時限爆弾が仕掛けられています」と呼び掛けた。病气との闘いは、時間を刻一刻

と削る厳しいものであった。出席者は、茂子さんが自ら告白したその一言に強い衝撃を受け、公的骨髄バンク設立を訴える声に耳を傾けた。



奉仕団体に招かれ、ドナー登録を呼び掛ける陽田さん。一貫して骨髄バンク支援のリーダー役を務めている。

当時は民間の骨髄バンクしかなく、ドナーの登録検査費用はボランティアの負担となっていた。しかし、同推進連絡協議会は登録検査費用の一部を負担した。

シンポジウムがきっかけとなり、患者の家族による自発的なネットワークもできて、「お互いに励まし合おう」という、強い支援体制もできていった。茂子さんは闘病の末、九三(同五)年に帰らぬ人となった。

大きな悲しみを乗り越えて、陽田

患者や家族呼び掛け

さんは県内のボランティアや患者、患者家族を支援し続ける。そのうえで、ドナーやボランティアらが医療の現場を変えたと評価する。

「医療の現場にドナーが入ったことで、情報の透明性が高まった。患者と医師とドナーは平面のトライアングルの関係で、決して上下関係ではありません」

さらに、今後の課題については「全国で骨髄移植ができる病院は百十施設ぐらいだが、病院間での実施例には差がある。病院側は治療成績を公開し、患者が治療を受ける病院を選択できる時代にした」と指摘する。

医療の情報公開にも着目する。「白血病でいうと病気の性格からインフォームドコンセント(説明と納得)は進んだ。今後は複数の医師に意見を聞くセカンドオピニオンも普及させたい」

その目は意欲に満ちあふれている。「患者への直接的な支援をもっと充実させたい。電話相談や経済的・精神的な支援などにも広げていければ」とボランティア活動の課題にも触れる。